



新聞畫會 第八号

藤左衛門文婦まで
大坂よりの帰路

明治八年三月十六日
越前と近江の境なる
初の本峠の麓にて
二人の死骸あり是ハ
雪類れりて死せし
其人ハ越中の國
高岡阪下町の
富家村田



九化略記附傳

かろ方災ひの逢ひ
と我此雪れりて
山の雪春の陽
氣にて山の肌と
雪と離れ切たる
時をばれか
ハ忽ち落る
其雪大盤石
の如くより
ある者必ず
助かるを得すと
北陸旅行の人ハ
用心ありて
東京日々
九百七十三号 板翠

修不齋
いんぎん